



災害や安保法制下での政府や 自衛隊のあり方を表現した作品

『シン・ゴジラ』

瀧澤利行 (茨城大学教育学部教授)

2016年夏の映画の話題を『君の名は。』(新海誠監督)と二分したといっ

てもよい東宝製作の特撮映画『シン・ゴジラ』は、『ゴジラ FINAL WARS』

以来12年ぶりの国産ゴジラ映画である。前回は1960年代の『怪獣大戦争』『怪獣総進撃』をモチーフに東宝特撮の『海

底軍艦』や『妖星ゴラス』を挿入したその時点では最終作としての顔見世的な作品で評判を落としたので、しばら

くゴジラ映画を封印したとみられた東宝が、『新世紀エヴァンゲリオン』や巨

神兵で定評を得ている庵野秀明を脚本・総監督、ガメラシリーズで独特の特撮

世界を演出した樋口真嗣とじを特技監督に据えた制作陣で臨んだ作品である。

脚本のモチーフは1954年の『ゴジラ』、そしてあまり指摘されていないが1984年の『ゴジラ』を系譜的

には継承しているとみられる。以上の3作が日本制作のゴジラ映画ではゴジ

ラのみが登場する映画である。すなわち、人類、といっても主に日本人が日本に襲来するゴジラと他の怪獣や怪獣

型ロボットを介さず、人間の力だけで対峙する構成をとっている。

ストーリーは明快だ。1隻の不審なクルーザーを海上保安庁が発見することから始まる。東京湾に謎の巨大生物の存在が確認され、その後さほどの間もなく、完全態ゴジラの前駆形態である「第2形態」ゴジラが多摩川から大

田区に上陸し、都市破壊を行い、第3形態に変態し、そのまま破壊を続ける。日本政府は総理大臣(大杉漣)を中心に、住民の避難と対策を協議するが、行政の縦割り主義と意思決定の遅滞から大きな被害を出す。品川近辺で自衛

隊によるゴジラの攻撃を図るが、避難に遅れた住民が発見されたため総理は攻撃中止命令を出す。「自衛隊の武器を国民には向けられない。」と。その

後ゴジラはなぜか東京湾に姿を消す。政府は内閣官房副長官矢口(長谷川博己)を中心とした「巨大不明生物特設災害対策本部(巨災対)」を組織し、対応を図る。そんな中、アメリカの大

統領特使が緊急来日し、ゴジラは海棲

生物が放射性廃棄物を摂取して適した生物であり、日本で学会を追われ渡米した牧悟郎元教授(写真のみ・岡本喜八、ちなみに「牧吾郎」の役名は1984年ゴジラの主役として新聞記者の役で登場している)がその存在を突き止め自らの出身地、大戸島の伝説にある「呉爾羅」からゴジラと名付けていたことを告げる。そのような中、

ゴジラは2倍近くに巨大化して、鎌倉に上陸し、横浜、川崎を通過し、武蔵小杉で自衛隊東部方面軍と対決する。自衛隊のあらゆる攻撃を退けたゴジラは再び都内に侵入。港区内で米軍機の攻撃を受けたゴジラは口から紅蓮の

火炎を吐き周囲のビル群を根こそぎ焼き払う。この際に立川に移動しようとしていた総理大臣をはじめとする政府

首脳部は、ヘリコプターごと撃墜され行方不明となる。そこで矢口を中心とした若手政治家、官僚による「巨災対」

は、米国から提供された牧教授のデータを読み解き、ゴジラの核エネルギー供給システムを血液凝固剤によって停止させる矢口プランの実施に移ること

になる。

観ればわかるように、骨格を形作っているのは東日本大震災における被害とそれに対する政府の対応のあり方、そして安保法制下での自衛隊の存在についての現実的なシミュレーションである。また首相代理となった農林水産

大臣が「彼の国」と呼ぶ米国の影響力の表現の仕方は、孫崎享うける氏が『戦後史の正体』で暴いた米国理解と同軌しているようにもみえる。映画が概して好評な理由は、ゴジラの映像演出とともに、政府や自衛隊がこうした状況に遭遇したらどのように対処するかを丹念に調べた上で、登場人物にそのプランを立案させているところにある。虚構を生かすのはリアリティであるという

空想科学の基本を忠実になぞった点が今回の成功の鍵とみることができ。住民の避難や矢口プランが間に合わなかった場合の東京核攻撃に対応する疎開などのシーンや体育館での避難生活シーンは、明らかに近年メディアで報道される災害対応のイメージを踏襲しているが、ディテールは尺の関係もあるのだろうが省略されている。その点では日々生活する市民の視点からはあと一歩の感があった。

イラスト フローラル信子



『シン・ゴジラ』脚本・編集・総監督：庵野秀明／監督・特技監督：樋口真嗣／2016年／東宝

*このコーナーは、リニューアル前の本誌で連載していたものです。